

東南アジア史史料としてのマレー印章

アナベル・T・ギャロップ (大英図書館)

(講演要旨)

マレー印章 —東南アジアで使用された、アラビア文字で刻印された印章— は、300年以上にわたって、東南アジア島嶼部一帯で王族の権威の象徴として使用されてきました。これまでに約 1900 点にのぼるマレー印章が記録されており、その中には 1560 年頃から 20 世紀初頭に至る様々な時代、また、西はアチェ、北はスルー、ミンダナオ、東はフローレス諸島に至る東南アジア島嶼部のほぼ全域のものが含まれています。

マレー印章には、所有者の名前、称号、家系、地名、年号が注意深く、一貫性をもって刻まれている場合が多く、そのため、総じて信頼性の高い歴史的証拠といえます。これまでに知られているマレー印章の大半は、東南アジアの支配者とヨーロッパ勢力との間で交わされた書簡や条約に捺印された印影です。これまでに知られているマレー印章の半数以上に年号が記されていることを考えると、マレー印章は、マレー世界の歴史や支配者の伝記にとって重要な一次史料であるといえます。たとえば、1614-15 年に在位していたパハンのスルタンの名前を示す唯一の証拠は、スルタン・アラウッディン・リアヤト・シャーという名が刻まれた印章です。このようにマレー印章は、それが捺印された文書を併用することによって、東南アジアのイスラーム諸王国に関する年代学上の問題を解決するにあたって大変重要な役割を果たしています。(訳：川島緑)



(左) マギンダナオのスルタン、ムハンマド・アジムッディン (在位 1780-1805) の英国ジョージ 3 世あて書簡 (1775 年 6 月 5 日付) の印影。(British Library, IOR: H/128, p.496)

(右) クダールのスルタン、アフマド・タジュッディン・ハリム・シャー (在位 1803-1843) のミント卿宛書簡 (1811 年 5 月 20 日付)。(British Library, MSS Eur.D.742/1, f. 3)